

「愛猿記賞」【佳作】

「愛を紡ぐ人 子母澤寛」

北海道 たけだ みつえ

恥ずかしながら、子母澤寛という小説家の名を知らなかった。

所が、書かれた多くの著作の中に「国定忠治」「大前田英五郎」「遠山の金さん」等があり、驚いた。子供の頃よく見ていた時代劇のタイトルだ。「座頭市物語」は、シリーズものとして映画化され「勝海舟」も、NHKの大河ドラマとして放映されている。しかも、北海道厚田村の出身。どんな人なんだろうと、生い立ちを含め興味を持った。

生後まもなく母親と別れ、父親はどこの誰とも分からぬ。母の叔母と、その夫を祖父母として育てられた。複雑な家庭環境ではあったが、決して不幸ではなく、むしろ愛に包まれた幼少期だった。

祖父は明治維新の際彰義隊に加わり、後に厚田村で網元になった元武士。厳格だが涙もろく、子母澤に盲目の愛を注いだと言う。

祖母も又、どんな苦労もいとわず夫を支えた、優しく美しく愛情深い人と、書物に記されている。

この祖父母の存在は、両親との縁が薄かった子母澤にとっては、何物にも代え難い大切な心の拠り所であった。思慕への念からか、登場人物に二人の面影を偲ばせた小説も幾つかある様だ。

「新選組始末記」に始まり股旅ものから幕末もの、そして「愛猿記」等々数多くを生み出しているが、どの作品も一本ずつ丁寧に全力を注ぐ事をモットーとした。「国定忠治」執筆中は、忠治が夢に出て困る程だったと言うから、寝ても覚めても一途に惚れ込んだ主人公への思い入れが窺える。

子母澤の作品には、生活の息づかいや体温が感じられる、と評する人がいる。人間が大好きだった人だ。何よりも、人々の暮らしの描写を大事にしたのだろう。

小説を書くに当たって子母澤は、自分の足、目、耳を大いに活用。その情報を元に想像を膨らませ、台詞を入れている。新聞社を二十年勤めた経験故か、徹底した取材振りだったらしい。文章に躍動感や迫力がある、と言われる所以であろう。

猿を題材にした「愛猿記」は、ノンフィクション。引き取った猛猿に躊躇を試みる様や、主従を分からせる為に急所である首に咬みつく等々、常人の域を越えている。

だが読者に語り掛ける様な文面からは、子育てならぬ猿育てを楽しむ作者の様子しか見えてこない。猿の糞とおしっこの中で寝る事を厭わない非尋常さは、

子母澤を猛愛した祖父の存在を思い出させる。

生きとし生けるものへの愛——それが子母澤文学の原点だとしたら、幼少期に祖父母、とり分け祖父からもたらされた無償の愛こそが、彼を小説家へと導いたのではないだろうか。

たっぷりの愛を受けて育った人は可愛い年寄りになる、という説がある。晩年の子母澤も又、好み爺であったらしい。